

Y2-35

看護観の確立につながる新人看護師による看護業務量調査

姫路赤十字病院 看護部

芝山 富子、芦田真知子、若松 良子、
藤井 育枝、世良 優子、坂本佳代子

【目的】当院では昨年10月から急性期看護補助体制加算¹を取得しているが、それに伴う看護業務の整理を行うため、9月に看護業務量調査を行った。調査に際して、看護師・看護助手の業務量を調査分析するだけでなく、新人看護師（以下、新人）を調査員とすることで、適切に業務調査を行うだけでなく、新人が他部署を知り、他者の看護に触れることで自分の看護を振り返り、看護観の確立につなげる機会とすることを目的とした。

【方法】調査は、2病棟の看護師・看護助手の各勤務における業務内容について、看護業務区分表をもとに記入し、平成22年9月に1病棟あたり2日間実施した。業務調査員となる新人看護師は、紙面にて説明の上協力を依頼し、部署の係長の指導を受けながら業務調査のプレテストを受けて実施した。調査終了後に無記名で自由に感想を記入してもらった。

【結果】新人は、看護業務区分表に記入するだけでなく、調査対象の行動から自身の看護を振り返るとともに、様々な影響を受けていたことが分かった。日常的に多重課題状況にあることや、メンバー間の協力や時間管理が重要であることに気づき、自部署では経験できない看護ケア・処置等を知る機会となった。また、普段はじっくりと見る機会が少ない先輩・同期の看護師が実践している看護を身近に見ながら、自身の看護についてのリフレクションにより、日頃経験していることの意味づけをしながら看護についてじっくりと考える機会となっており、自己の看護観の確立につなげることができた。

Y2-36

院内看護研究に関する実態調査

前橋赤十字病院 看護部

鈴木良重子、清水 明美、原田 博子、
伊藤 好美、柳澤 美香、大賀さゆり、
牧口 美江、福田 富江、前田 陽子

【はじめに】A病院では、看護研究として1年間の研究を進め、院内看護研究発表会、研究論文の提出までに行っている。この間、研究メンバーから「日勤業務が忙しく研究の時間がとれない」「休日の研修が多くてイヤ」「プライベートの時間が取られてしまう」などの声が多く聞かれ、研究委員会として、この問題に関して改善が出来るかを検討した。

【研究目的】院内看護研究に関する実態を明らかにし、研究に関する問題を改善し、研究を自主的に進められるように研究環境について考察する。

【方法】院内の看護師を対象にアンケート調査（選択式・自由記載）を実施。

【結果】看護師は、看護研究の院内研修に65%、院外の研修に39%参加している。研修に参加したことが看護研究の展開に役立っているは、47.9%である。発表者や協同研究者としての学会参加は61.5%である。研究に取り組んだ経験は63.9%である。看護研究をした動機（複数回答）は、「強制的に順番で」45%、「上司に勧められて」32%、「自己研鑽の為」47%、「やらないと取り残されるから」6.7%である。看護研究に対する気持ちは、「やりたくない」39.6%、「自分の学習」27.3%、などであった。研究を妨げる要因は、「業務が忙しい」、「時間外に研究をしなければ成らない」、「研究メンバーとの時間調整が難しい」、「私的な時間が使われる」などであった。

【考察】看護研究の実態調査から妨げの要因が明らかになった研究委員会として、研究時間の確保（月2時間）メンバーのスケジュール調整、指導体制、スタッフの強力な依頼など、検討し、各病棟に伝達し、負担の軽減に努めた。今後改善内容の効果を検討していく必要性を感じている。